

Title	重力の観念史
Sub Title	Histoire culturelle de la notion de pesanteur
Author	奥村, 大介 (Okumura, Daisuke)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2012
Jtitle	哲學 No.129 (2012. 3) ,p.43- 72
JaLC DOI	
Abstract	<p>Dans cet article, nous voudrions tenter de faire une analyse diachronique des idées relatives à des notions telles que la gravitation, la pesanteur et la chute depuis l'Antiquité jusqu'au vingtième siècle. Certes, la gravitation dans le sens scientifique est la fruit du temps moderne, si bien que l'essai de la chercher dans l'Antiquité risque de retomber dans l'anachronisme. Donc, ce que nous voudrions essayer de faire est plutôt de traiter des notions comme "a gravitation", "la pesanteur", "l'attraction", "la chute" etc. dans le contexte extra-scientifique et culturelle pour en donner un relief de l'histoire intellectuelle là-dessus. En un mot, on pourrait qualifier notre effort de "la généalogie philosophique sur la pesanteur". L'idée moderne de la gravitation est le sujet de l'histoire des sciences avec les génies comme Kepler, Newton et Einstein etc. Mais ici, nous recherchons les émergences d'idée de la gravitation ou la pesanteur dans les domaines alentour de l'histoire de la philosophie, la littérature, la pensée religieuse et la pensée sociale comme Platon, Dante, Bossuet, Charles Fourier, Italo Calvino, Simone Weil etc., parallèlement au développement concomittant des idées scientifiques. Et cette histoire culturelle de la pesanteur sera constituée surtout sur les deux axes, à savoir, "la maîtrise de la pesanteur" et "le consentement à la pesanteur".</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000129-0043

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

重力の観念史

— 奥 村 大 介* —

Histoire Culturelle de la Notion de Pesanteur*Daisuke Okumura*

Dans cet article, nous voudrions tenter de faire une analyse diachronique des idées relatives à des notions telles que la gravitation, la pesanteur et la chute depuis l'Antiquité jusqu'au vingtième siècle. Certes, la gravitation dans le sens scientifique est la fruit du temps moderne, si bien que l'essai de la chercher dans l'Antiquité risque de retomber dans l'anachronisme. Donc, ce que nous voudrions essayer de faire est plutôt de traiter des notions comme «la gravitation», «la pesanteur», «l'attraction», «la chute» etc. dans le contexte extra-scientifique et culturelle pour en donner un relief de l'histoire intellectuelle là-dessus. En un mot, on pourrait qualifier notre effort de «la généalogie philosophique sur la pesanteur». L'idée moderne de la gravitation est le sujet de l'histoire des sciences avec les génies comme Kepler, Newton et Einstein etc. Mais ici, nous recherchons les émergences d'idée de la gravitation ou la pesanteur dans les domaines alentour de l'histoire de la philosophie, la littérature, la pensée religieuse et la pensée sociale comme Platon, Dante, Bossuet, Charles Fourier, Italo Calvino, Simone Weil etc., parallèlement au développement concomittant des idées scientifiques. Et cette histoire culturelle de la pesanteur sera constituée surtout sur les deux axes, à savoir, «la maîtrise de la pesanteur» et «le consentement à la pesanteur».

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学），日本学術振興会特別研究員

はじめに

“La chute y crée l'espace, la chute approfondit l'abîme.”

〈墜落はそこに空間を作り、深淵をより深くする。〉

Bachelard, *La terre et les rêveries de la volonté*.

本稿は古代から現代にいたる「重力」の概念を観念史¹の方法を用いて記述し、分析しようとするものである。むろん、重力という概念そのものは近代の産物であり、古代の思想史に重力という言葉が適用することは厳密に言えばアナクロニズムであるが、ここでは広い意味で「重力」「重さ」「引力」「落下」といった言葉で表現される観念を大括弧に扱い、太書きの精神史を記述することを目的とする。本稿の主題を一言であらわすならば「思想的・想像的重力論の系譜」²ということになる。この系譜を記述することで、ものが落ちることがいかなる現象としてわれわれの文化のなかで捉えられてきたかを探ってみたい³。本稿の扱う主要な対象は、科学史ではない⁴。近代の重力概念は、むろん科学史の対象として、ケプラー、ニュートン、アインシュタインといった固有名詞とともに記述され

¹ 観念史 (history of ideas) は米国の哲学者ラヴジョイ (Arthur Oncken Lovejoy, 1873-1962) を嚆矢とする観念史学派 (History of Ideas Club) の方法論を基礎とするものである。観念史の方法では、思想の基本的な原型である単位観念 (unit-ideas) を設定し、この単位観念が歴史上にさまざまな現れとして展開する様態を史料のジャンルを越境しつつ捕捉する。本稿における単位観念は「重力」である。

² ここで「思想的」と「想像的」という二つの形容詞を同格に用いることに違和感を覚える読者もあろう。思想に真偽があるとして、想像力にも真偽があるのか、といった重要な問いが無視されたまま、重力の概念やイメージが無秩序に並べたてられるという印象を、あるいは本稿は与えるかもしれない。ここでは思想と想像力という問題に立ち入ることはできないが、さしあたり哲学者バシュラルの「想像力は決して誤らない」(Gaston Bachelard, *La Poétique de l'espace*, Paris: PUF, 1957. [『空間の詩学』(岩村行雄訳)、ちくま学芸文庫、266頁]) という言葉を引用し、本稿の立場もそれに共鳴するものであることを表明しておこう。

るのが通例である。だが本稿は、そうした重力概念が科学史上で展開してゆく傍らで、哲学史、文学史、宗教思想史、社会思想史といった領域に重力の概念が現れ、それぞれの領域で独特の意味を獲得していった様態を描き出すことを目的とする。

³ ここで「落ちる」というのは、文字通り物理的に落ちる「落下」から、比喩的な意味での「失墜」や「墮落」まで幅広く含む言葉と考えたい。欧文でも、たとえば仏語で「落下」を意味する *la chute* には物理的な意味から、社会的・倫理的・経済的な「転落」「墮落」「頹落」まで、広い意味がある。Cf. Albert Camus, *La chute*, 1956. カミュ『転落』(大久保敏彦・窪田啓作訳)、新潮文庫、2003年。また「重力」についても、本稿では「重さ」とか「重量」という意味と、あえて明確な弁別をせずに用いる場合がある。それは本稿が扱う対象がニュートンの引力概念の流布する以前の思想、あるいはニュートン以後であっても前ニュートンの重力観が残響している文化領域を主要な対象としているため、コーパスの文脈上の用語法に従うためである。現代的な語感からは「重力」と「重さ」は必ずしも同じものではないだろう。もっとも、参考までに、本稿の欧文タイトルで用いた「重力」の語は仏語の *la pesanteur* であり、これは「重力」とともに「重さ」を意味し、形容詞として *pesant(e)* とすれば「重い」(物理的にも比喩的にも) という意味に、動詞形 *peser* は自動詞で「重さを有する」、他動詞で「(秤で) 重さはかる」という意味に、それぞれなることも附言しておきたい。なお、本稿にとって重要な先行研究として、まず遠隔作用としての重力概念の形成史を扱った次の三つの書物が挙げられる。山本義隆『磁力と重力の発見』(全3巻、みすず書房、2003年)、Max Jammer, *Concepts of Force: A Study in the Foundations of Dynamics*, Cambridge [Mass.]: Harvard UP, 1957 [ヤンマー『力の概念』(高橋毅・大槻義彦訳)、講談社、1979年)、Mary Hesse, *Forces and Fields: The Concept of Action at a Distance in the History*, London: Nelson, 1961 (Mineola [N.Y.]: Dover Publications, 1999)。さらに、「飛行」と「落下」の想像力を広く論じた文献として Gaston Bachelard, *L'Air et les songes*, Paris, 1943 [バシュラール『空と夢』(宇佐美英治訳)、法政大学出版局、1968年] は、今なお、ほとんど唯一無二と言ってよい地位にある書物である。

⁴ 本稿では一部、科学史や技術史にも触れることになるが、それはどちらかといえば付随的なものである。本稿のコーパスの取捨選択に基準があるとすれば、近代の科学者以外の著述を中心的な対象としたということに尽きる。

1. 重力前史

“la Loi newtonienne de la Gravitation. [...] la réaction du premier Acte Divin”
〈ニュートンの重力法則 [...] 神の最初の行為に対する反作用〉
E. A. Poe, *Eureka*, trad. par Baudelaire.

重力の概念は、アリストテレス (Aristoteles, 384b.c.-322b.c.) の自然科学からは要請されない。彼の体系では、あらゆる物質はそれに固有の場所をもっており、重い物体は地球の深奥を固有の場所とするので、大地をめざして落下するとされる。より重い物体は、大地の中心をめざす傾向が強いので、より早く落下する——ここに重力の概念はない⁵。アリストテレスの落体論は1000年以上にわたって西欧の自然科学を支えてきたが、ガリレオ (Galileo Galilei, 1564-1642) の実験——ピサの斜塔から重さの異なる二つの球を落下させたときとされる⁶——により、物体の重さにかかわらず落下速度は一定であることが明らかとなって揺らぎはじめる。だが、ガリレオの時点では、落下の理論と力の概念が明示的に結びつけられることはなかった。現代につながる重力概念の直接的な先駆はルネサンス期の科学者

⁵ 本稿では紙幅の関係で古代思想における重力の問題には深く立ち入ることができない。そもそも古代ギリシアにおける「重さ」の概念についてはいまだ研究途上にあり、ドゥニ・オブリアン (Denis O'Brien, 1936-) が4巻本として刊行する予定であった *Theories of Weight in the Ancient World*, Paris: Les Belles Lettres ; Leiden: Brill も、第2巻までが出版されたのち途絶している (vol. 1, 1981 ; vol. 2, 1984)。アリストテレスについては、同書第3巻全篇を捧げて論じることが予告されていた (さしあたっては同書第1巻 Part One, pp. 3-114, pp. 260-266 また第2巻 Part Three, pp. 175-191, pp. 192-215 が参考になる)。

⁶ ガリレオによるピサの斜塔の落体実験にせよ、ニュートンの林檎にせよ、よく知られたエピソードであるが、史実としての信憑性には疑問が出されている。ピサで行われたのは実際には2本のレールの上に重さの異なる二つの球を走らせる実験であるとか、ニュートンが万有引力論を着想したのは純粋にケプラーの法則に対する思想的・自然学的省察によるものであるとか、云々。だが、ここではそうした問題にはあえて立ち入らない。

ギルバート (William Gilbert, 1544-1603) とケプラー (Johannes Kepler, 1571-1630) の理論が交錯する過程に見出される⁷。ギルバートは地球が巨大な磁石であると考え、そこからケプラーは離れた天体の間に働く引力作用を着想した。ギルバートによれば、「月は地球に磁力的に結びつけられている。そのため、その面はつねに地球に向いている」という。これをうけてケプラーは「自身が磁性体である地球は、その〔放出する運動〕形象によって月を動かす [...]」と述べている。ちなみに、この地球に引きつけられる月、いわば地球に落下しようとする月は、重力論の基調的イマージュとして、以後われわれの幾度か目にするところとなるだろう。ギルバートとケプラーによる引力概念は 17 世紀にニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) の『プリンキピア』(*Philosophiae naturalis principia mathematica*, 1687) によって万有引力として一般法則を与えられ、物体の落下現象もこの法則から説明されることになった。初期近代にニュートンの法則が急速に受容されるための受け皿になったのは、人間を心理的に引きつける〈愛〉と自然界の物体を引きつける〈引力〉を類比的にとらえる神秘的な思想——ヤコブ・ベーメ (Jakob Böhme, 1575-1624) らにみられる引力概念であった⁸。この着想をさかのぼればエンペドクレス (Empedocles, c.490b.c.-c.430b.c.) の自然観、つまり万物は愛により結びつき憎悪により反発するという自然哲学にいたる。ニュートンの引力概念にしても、今日の無機的・機械論的な概念ではなく、非機械論的・非物質

⁷ 山本、前掲書、第 3 巻、第 17-18 章 (pp. 605-734)。以下のギルバートとケプラーに関する記述と引用は、本書に依拠している。

⁸ Hélène Tuzet, *Le cosmos et l'imagination*, Paris: Corti, 1965, pp. 29-30。なお、物質どうしの間にはたらく引力と人間のあいだにはたらく愛を類比的にとらえる想像力は、のちのゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の小説『親和力』(*Die Wahlverwandschaften*, 1809) にも見出される。

的、あるいは精神的ともいえるようなエネルギーで⁹、彼自身はそれに信仰心さえ抱いていた¹⁰。だから、重力の概念が近代にいたっても自然科学以外の領域に倍音を響かせることは、ほとんど必然といえよう。本稿が対象としている想像的重力論ないしは思想的重力論と呼ぶべきものは、いわばその倍音であって、自然科学と接しつつそこから微妙に離れた位置を流れる観念の系譜として以下の節で描かれることになる。そして、この系譜は、〈重力の克服〉と〈重力への同意〉という二つの軸で検討される¹¹。

2. 罪の重さ—ダンテとボシュエ

〈天文学は、地上の罪のかぞえ唄なのかもしれない〉
寺山修司「アダムとイブ、私の犯罪学」

ダンテ (Dante Alighieri, 1263-1321) の『神曲』(*La Divina Commedia*) は、二人の詩人——ヴェルギリウスとダンテ——による冥界旅行を描いた長編叙事詩である。地獄に落ちた人々の罪は煉獄 (Purgatorio) と呼ばれる浄化のための世界で清められる。この世界には煉獄山が聳え立ち、亡者たちは山を登ることで、山の高さに応じて罪が浄化

⁹ Alexandre Koyré, *From the Closed World to the Infinite Universe*, Baltimore: John Hopkins Press, 1957, p.153. Cf. コイレ, 野沢協訳『コスモスの崩壊』, 白水社, 1974年。

¹⁰ Hélène Metzger, *Attraction universelle et religion naturelle chez quelques commentateurs anglais de Newton*, Paris: Hermann, 1938, 2^{ème} partie, Section III.

¹¹ 本稿で「重力」と「引力」の使い分けは必ずしも完全に一貫しているわけではないが、原則として、天体間の巨視的な牽引現象としては「引力」を、そして地上の物体と地球との間に生じる牽引現象としては「重力」を用いる。参考までに『世界大百科事典』の「重力」の項目(村田一郎執筆)では、次のように説明されている。「重力という語は宇宙論などでは万有引力のことをさすこともあるが、地球についていう場合には地球上の物体にはたらく地球の万有引力と地球自転による遠心力との合力をさす。われわれにはこの重力は物体の重量として感じられる」(『世界大百科事典』, CD-ROM版, 第2版, 平凡社, 日立システムアンドサービス, 2008年)。

される。二人の詩人にとってこの登攀は、当初、困難をきわめる。

Noi divenimmo intanto a piè del monte:

Quivi trovammo la roccia sì erta,

Che 'ndarno vi sarien le gambe pronte.¹²

かゝるうちにも我等は山の麓に着けり、

見あぐれば^{いはお}と峻しく、

脛^{はぎ はや}の疾きもこゝにては益なしとみゆ¹³

煉獄山の登山が過酷なものとなるのは、むしろこの峻厳な地形のためだが、ダンテのように地獄からやってきた亡者たちが罪人であるために罪の重さを背負っていることにもよる。七つの大罪が、登攀とともに一つずつ浄められて消えてゆくにつれ、ダンテの重力は七分の一ずつ減少してゆく。「罪が重い」という言い方があるが、ここでは文字通り、罪は身体に働く重力として描かれている。煉獄の山を登るほどに罪が減るので、登攀は容易になる。地上楽園で罪を完全に浄化されたとき、身体の重さは^{ゼロ}零になり、天上へといたる¹⁴。

キリスト教思想の伝統のなかでは、17世紀の神学者ボシュエ(Jacques-Bénigne Bossuet, 1627-1704)もまた、罪の重さを重力に類比して語っている。「自然界の物体に働く重力 (la pesanteur) が人を大地へと落下さ

¹² Dante Alighieri, *La divina commedia*, Milano: Mondadori, 1938, «Purgatorio», Canto III, v.46-48.

¹³ ダンテ『神曲』(山川丙三郎訳), 岩波文庫, 1953年, 中巻(「浄火」), 第三歌, 46-48行, 26頁.

¹⁴ 以上の『神曲』解釈は, Marina Marietti, *Dante*, coll. «Que sais-je» N° 2971, Paris: PUF, 1995. マリーナ・マリエッティ『ダンテ』(藤谷道夫訳), 白水社・文庫クセジュ, 1998年(とくに訳註 p.163)による.

せること以上に、罪が人を地獄へと押しやることは必然的である。¹⁵ 物体の必然的運動と罪人に対する運命の必然を類比したこの比喩は、まさに説教・演説の雄弁をもって知られるボシュエらしい、巧みなものといえよう。同時に、ここには一種の自然主義的な要素がみてとれることも思想史的には重要である。つまり、人倫の規範を説明するために、自然現象が参照されているのである。宗教上の倫理的要請に自然界の物体の振る舞いが根拠を与える——これは、或る意味ではいかにも科学革命の世紀、ガリレオの一代ばかり後に生まれ、ニュートンと同時代人というこの神学者ならでは語り口といえるかもしれない¹⁶。

ダンテやボシュエのようなキリスト教文学・思想のなかでは、罪の現れとしての重力は取り除かれるべき悪である。重力から解放され、天上をめざすこと。これを〈重力の克服〉と呼ぶことにしよう。重力は人を地上につなぎ止め、天に昇ろうとする者に墜落をもたらす。罪を背負い、重い甲冑のごとき肉体をまとった地上的存在から、天上界への上昇を果たすためには、重力を脱しなければならないのだ。

3. 翼の生えたイデアーダイダロスの末裔たち

“ad astra per aspera.”

〈苦難を通して星々へ〉

Seneca, *Hercules Furens*, 437

〈重力の克服〉という指向は、罪の浄化や地上的な生からの離脱といった比喩的な意味での重力を脱することから、実際に身体を大地に縛り付ける物理的な重力を取り去ろうとする夢想へとつながる。ダンテのように、幻視的世界で天上を目指すのではなく、この世界で空をめざすこと。この

¹⁵ Jacques-Bénigne Bossuet, *Pensées chrétiennes*, s.d.: Œuvres complètes de Bossuet, tome X, Paris: Vivès, 1872, p.591.

¹⁶ むろん、自然主義的な倫理説自体はストア派の哲学などにも広くみられる。

観念は飛行や上昇の想像力と手を取りあう。

上昇の想像力の原型は〈翼〉である¹⁷。重力に打ち克つ自然的存在はみな翼をもつ。鳥類の翼、蝶やトンボの翅。ボードレール (Charles Baudelaire, 1821-1867) によれば、「[...] 鳥や蝶、空中に浮遊する小蜘蛛の糸、さまざまな香り、その他すべての翼あるもののように、われわれは無限に向かって飛んで行くだらう。」¹⁸ 古くはプラトン (Platon, 427b.c.-347b.c.) の対話篇のなかに、次のような一節が認められる。「そもそも、翼というものが本来もっている機能は、重きものを、はるかなる高み、神々の種族の棲まうかたへと、翔け上らせ、連れて行くことにあり、肉体にまつわる数々のもののなかでも、翼こそはもつとも神にゆかりある性質を分けもっている。神にゆかりある性質——それは、美しきもの、知なるもの、善なるもの、そしてすべてこれに類するものである。」¹⁹

神話的想像力のなかで、天に昇ろうとする人間が重力を脱するための技術として選んだのも鳥の羽であった。ギリシア神話に現れる工匠ダイダロスは鳥の羽を集めて翼を作り、幽閉された塔から脱出した。そのとき、ともに飛び立った息子イカロスが太陽に近づきすぎたために、翼をかためた蠟が融け、墜落死した逸話はあまりに有名だ。飛行の想像力は、原初より墜落の恐怖と隣り合っている。

上昇の想像力の歴史的な展開、つまりダイダロスの末裔たちと呼ぶべき系譜には二つの流れがある。第一にそれは、〈翼〉を技術的に実現しようとする、いわば工匠ダイダロスの直系と呼ぶにふさわしい系譜で、航空技

¹⁷ Cf. バシュラール『空と夢』、前掲訳書、第2章「翼の詩学」、91-129頁。

¹⁸ Charles Baudelaire, *Les Paradis artificiels*, 1860: Œuvres complètes, tome I, Paris: Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1975, p.381. Cf. ボードレール『人工楽園』(渡邊一夫訳)、角川文庫、1955年。

¹⁹ プラトン『バイドロス』(藤沢令夫訳)、246E、岩波書店版全集、第5巻、181頁。

術の発展史を形づくる²⁰。古くは古代ギリシアの学者アルキユタス (Archytas, 428b.c.-347b.c.) が〈鳩〉と称する小型の飛行機械を製作したと伝えられる。もっとも、これはなかば伝説に近い。興味深いのは、ヨーロッパでは伝統的にキリスト教聖職者たちのなかに飛行機械を考案した者が多いことである。英国では11世紀に修道士エイルマー・オヴ・マルムズベリー (Eilmer of Malmesbury, c.985-c.1066) が翼を用いて空を飛ばうと試み、数百メートルを滑空したが、墜落して重傷を負っている。17世紀のイタリアではイエズス会士フランチェスコ・ラナ・デ・テルツイ (Francesco Lana de Terzi, 1631-1687) が一種の飛行船を考案している。18世紀に入ると、ポルトガルの聖職者バルトロメウ・ロレンソ・デ・グスマン (Bartolomeu Lourenço de Gusmão, 1685-1724) が〈パッサローラ (Passarola)〉という飛行船を設計し、また球体を宙に浮かせる公開実験を行うが、異端の疑いをかけられスペインに亡命している。また1783年にはミラノのバルナバ教会 (Chiesa di San Barnaba) の修道士たちが「燃える空気」(水素)を封じ込めた小気球を飛ばしたという記録がある²¹。彼らもまた天上界をめざして、飛行技術の発明に駆り立てられたのだろうか。ここには神学的夢想と技術的夢想の交錯が認められる。それは、すでに述べたようにニュートンが神学的想像力から万有引力という今日の科学に繋がる着想を得たこととともに、科学・技術・宗教が分化していない時代の興味深い精神史的事象と評することができよう。18世紀後半以降、時代の世俗化とともに、こうした^{フライング・マンク}〈空飛ぶ僧〉たちの活躍は影をひそめ、職人・科学者・発明家たちの手で、航空技術の開発が続けられ

²⁰ 以下に述べる航空技術史については、次の文献を参考にした。ロルフ・シュトレール『航空発達物語』(松谷健二訳)、上下巻、白水社、1965年。篠田皎『気球の歴史』、講談社現代新書、1977年。

²¹ 鷲見洋一『『百科全書』と世界図絵』、岩波書店、2009年、262頁。本書の第7章「一八世紀の夢—気球の旅」は、飛行の想像力をめぐる観念史的研究として重要である。

る。バルナバ会士が小さな気球を宙に浮かべたとされる 1783 年は、通例、航空技術史ではフランスのモンゴルフィエ兄弟 (Joseph Michel Montgolfier, 1740-1810; Jacques Étienne Montgolfier, 1745-1799) の業績によって〈奇跡の年〉と呼ばれる。彼らが紙袋に焚火で熱した空気を充たして飛ばせたのが熱気球の最初の成功であるとされる。同じころ、フランスの科学者シャルル (Jacques Alexandre César Charles, 1746-1823) も水素を用いたガス気球の実験に成功している。こうした技術開発の延長線上に、19 世紀のリリエントール (Otto Lilienthal, 1848-1896)、20 世紀初頭のライト兄弟 (Wilbur Wright, 1867-1912; Orville Wright, 1871-1948) といった近代的航空機技術の担い手たちが現れることは言うをまたない。やがて 20 世紀半ば以降、人類の翼は大気圏を脱し、宇宙へと飛び立つ。

ダイダロスの末裔たちの系譜——そこには不幸な墜落死を遂げたイカロスの末裔たちも数多く含まれていた——には、夢想の世界のなかで重力を脱する方法を発明した者たちがいる。彼らはいわば詩人ダイダロスだ。さきに引いたプラトンは、こんなことも書いている。「[...] 詩人というものは翼もあれば神的でもあるという、軽やかな生き物 [...]」²²

すでに述べたダンテは、冥界で地獄から天上界へと死者が自らの重さを失い飛び立っていく旅程を幻視し、14233 行に及ぶ韻文に歌った。同じくイタリアの大詩人アリオスト (Ludovico Ariosto, 1474-1533) の叙事詩『狂えるオルランド』(*Orlando furioso*, 1516) では、美女アンジェリカへの恋心が昂じて狂乱に陥った騎士オルランドを救うため、友人アストルフォは〈火の戦車〉に乗って月世界に旅立つ (第三四～三五歌)。アストルフォを月へと導く聖なる使徒ヨハネは語る。

²² プラトン『イオン』(森進一訳), 534B, 岩波書店版全集, 第 10 巻, 129 頁。

Gli è ver che ti bisogna altro viaggio
far meco, e tutta abandonar la terra.
Nel cerchio de la luna a menar t'aggio,
che dei pianeti a noi più prossima erra,
perché la medicina che può saggio
rendere Orlando, là dentro si serra.
Come la luna questa notte sia
sopra noi giunta, ci porremo in via.²³
そなたは私と、地上を離れて、
も一つ旅をせずばなるまい。
われらにもっとも近きところをさまよう星なる
月にまで、私はそなたを連れて行く。
オルランドを元の正気に返す
薬がそこにあるゆえ。
今宵月がこの上に登って来たとき、
二人して月へと旅立つことにしようぞ。²⁴

ヨハネは炎よりも赤い四頭馬の引く馬車にアストルフォともども乗り込み、手綱をかって天へ駆けのぼる。やがて到着した月は「鏡の面のごとく」、しみ一つない世界だった。そして、「地上にて失われたるものはみな、月の世界に集まって」いるという。

²³ L'Arioste, *Roland furieux*, tome II, traduction et notes de Michel Orcel, presentation d'Italo Calvino, Paris: Seuil, 2000.

²⁴ アリオスト『狂えるオルランド』（脇功訳）、名古屋大学出版会、2001年、下巻220頁（第三四歌、六七）。

Le lacrime e i sospiri degli amanti,
 l'inutil tempo che si perde a giuoco,
 e l'ozio lungo d'uomini ignoranti,
 vani disegni che non han mai loco,
 i vani desidèri sono tanti,
 che la più parte ingombran di quel loco:
 ciò che in somma qua giù perdesti mai,
 là su salendo ritrovar potrai.
 恋人たちの涙や吐息,
 遊びのうちに費やした無益な時間や,
 愚か者らの長き怠惰や,
 絶えて日の目をみることもなかった
 空しい企て、空しい望みが
 その場をほとんど埋めていた。
 地上ではもはや失せたるものすべて、
 月に昇れば見つけることができるのだった。²⁵

アストルフォはオルランドの正気が入った瓶をみつける。彼はこの光に満ちた球体を地上に持ち帰る。狂^{ルナティック}気を治療するために月に行くという逆説。文学的想像力のなかで、地球の重力を制した人物は、技術の歴史に先んじて、空を飛ぶどころか、はるか彼方の天体にいたる。

あるいはまた、17世紀の自由思想家シラノ・ド・ベルジュラック(Cyrano de Bergerac 1619-1655)²⁶は、『別世界、あるいは月の諸国』

²⁵ アリオスト、前掲書、下巻 221-222 頁（第三四歌、七五）。

²⁶ エドモン・ロスタン(Edmond Rostand, 1868-1918)の戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』(Cyrano de Bergerac, 1897)で知られる詩人にして剣豪、哲学者にして理学者、いわゆる「大鼻のシラノ」である。

(*Histoire comique des états et empires de la lune*, 1657) のなかで、無数の火箭(les fusées)²⁷を用いて月世界に到達する男を描いた。「(火箭を六つずつ並べて一段とし、その反ダースごとに起爆装置をめぐらせてあったので) 炎が一行の火箭を舐めつくすと、その次の段に火がつき、ついでその次の段という具合で、火薬に火がつくと、落ちる危険からは遠ざかるが、落ちたときの危険は増すというわけだ。」²⁸ あたかも現代の多段ロケットをおもわせるような記述である。この装置で到達した月面には、四足で歩く月人たちの文明世界がひろがり、それは地球の文明を凌駕するほどに発達していた。ちなみに、月に到達した主人公は、驚くべきことに、月の重力が地球のそれよりも小さいということを語っている。「月は地球よりも質量が小さい。そのため、その活動が及ぶ範囲も小さく、月に近づいてはじめて、ようやくその力を感じることができたのだろう。」²⁹

アリオストやシラノの文学は、地球の重力を離脱し、別世界へと旅立つ幻想旅行を描いている。これに対して、先に挙げたダンテにあつては、重力を脱するのではなく、重力そのものが減じることで天上世界に旅立つことが可能となっていた。このような重力の消滅のテーマは近代まで続き、〈反重力〉はSFのストーリーを支える重要な技術となる。19世紀米国の作家F.J. オブライアン (Fitz James O'Brien, 1828-1862) にはすでに『いかにして重力を克服したか』(*How I Overcame My Gravity*, 1864) という短編があり、回転するジャイロのような仕掛けが反重力を生じさせるという記述がある。H. G. ウェルズ (Herbert George Wells, 1866-1946) の『月世界最初の人間』(*The First Men in the Moon*, 1901) では、科学者ケ

²⁷ この言葉は現代のフランス語ではロケットを意味する。

²⁸ Cyrano de Bergerac, *L'Autre monde ou les états et empires de la Lune*, 1657: Œuvres complètes, tome I, Paris: Honoré Champion, 2000, p.29. Cf. シラノ・ド・ベルジュラック『日月両世界旅行記』(赤木昭三訳, 岩波文庫, 2005年。

²⁹ Ibid., p.30.

イヴァーが地球の重力を遮断する物質ケイヴァライトを開発し、地球の重力圏を脱することで月へと飛び立つ。

4. 万有引力の意味—重力の普遍化

“Nature and nature laws lay hid in night,
God said “let Newton be”, and all was light.”

〈自然界と自然法則は夜の闇に隠されていた。

神は言った。「ニュートン、在れ」と。すると世界は光に満ちた。〉

Alexander Pope, “Epitaph intended for Sir Isaac Newton”, 1730

ここまでわれわれは物体が落下するときに働く作用、つまり垂^{ヴェルティカリスム}直軸の現象として想像的重力論の系譜を追いかけてきた。だが、ニュートンの万有引力論によれば、たとえば林檎が地球へと落下する現象は地上から観測するから落下現象であるにすぎず、もしこれを宇宙空間から観察すれば、巨大な青白い球体と極小の赤い球体が互いに引き合っているように見えるだろう。だから重力や重さによる落下現象は、あらゆる物体が引き合うという万有引力へと拡大され、やがて 19 世紀には〈場〉の理論へと至り、20 世紀の場の量子論によって自然界の運動は場の作用に一元化される。だが、地上に生きるわれわれにとって、いまま重力の垂直性、そして落下という表象と結びついた重力の概念はリアリティを保ち続けている。だから想像的重力論の系譜はニュートン以降も命脈を保ち続け、垂直軸の想像力は文化史の各方面で豊かに展開される。本稿後半では 20 世紀の哲学や文学のなかに想像的な重力概念を探るが、その前に、ニュートンによっていわば落下現象から解放され、水平・垂直が相対化された宇宙空間における普遍的作用とされた万有引力が、きわめて特異な形で哲学的想像力と結びついた事例を 19 世紀初頭フランスの社会思想に見出し、検討しておきたい。そこに見られるのは、地上における重力の普遍化、水平化とすべき思想である。

5. 情念引力論—シャルル・フーリエ

“Magnet-like, of lovers' eyes;”
〈磁石のように引きつけ合う恋人たちの眼〉

P. B. Shelley, *Prometheus Unbound*, 1820, Act IV.

ニュートンによって世界の万物に引力が働いているという万有引力説が提唱された。ならば、人間の精神世界にも引力があつてしかるべきではないか。そう考えたのは、フランスの社会思想家シャルル・フーリエ (Francois Marie Charles Fourier, 1772–1837) であった。フーリエの書『四運動および一般運命の理論』(Fourier, *Théorie des quatre mouvemens et des destinées générales*, Leipzig: 1808)³⁰によれば、この世界には「社会的、動物的、有機的、物質的という四つの運動 (Mouvemens [*sic.*])」がある。そして人類が解明しえているのは「ニュートンとライプニッツによってその諸法則を発見された」³¹ 物質的運動のみであり、とくに人間精神の運動についてはまったく未解明であるという。そして、人間精神のなかでも、理性よりも情念の作用を重視し、人間が愛し合い惹きつけ合う力を引力になぞらえ、さらに人々が互いを嫌悪し敵対する力を斥力 (*répulsions* [*sic.*]) として、いわば情念の力学とでも呼ぶべき学問をつくったのがフーリエであった。そこで鍵となるのが、或る特異な力の概念である。フーリエは述べている。「私の発見した最初の学問、

³⁰ 引用底本とした 1808 年版は初版。このほかに数多くの版があり、それぞれの版の間にはかなりの異同がある。邦訳は巖谷國士訳『四運動の理論』、上下巻、現代思潮社、1970 年。なお、表題に含まれる *mouvemens* という複数形は、現在ならば通常 *mouvements* と綴る。以下、原語を示す場合、今日の一般的な表記と異なる場合でも原文どおり引用し、その都度 [*sic.*] と注記する。

³¹ Charles Fourier, *Théorie des quatre mouvemens et des destinées générales*, Leipzig: 1808, Introduction (n.p.). 訳書上巻 11 頁。なおライプニッツの重力論への寄与については、Hesse, *op. cit.*, pp. 157 ff を参照。

それは情念引力 (l'attraction passionnée) の理論であった。³² 情念引力と万有引力との間には完全なアナロジーが成立するとフーリエは考える。「[...] 情念引力の諸法則はあらゆる点で、ニュートンとライプニッツによって解明された物質引力の諸法則に合致するのである。そして物質界と精神界に通ずる運動体系の統一というものが存在するのだ。」³³ さらにフーリエは、ニュートンの万有引力が数学的に計算可能なように、情念引力ならびに斥力も定量的に扱うことができるという。彼は「[...] ついに情念引力および斥力の分析的かつ総合的な計算にまで立ち至った」³⁴ といひ、「情念引力および斥力の理論は確固たるもので、そのまま幾何学の定理に適用できるほど」³⁵ であると主張する。もともと、随所に数式が示されているニュートンの『プリンキピア』と異なり、『四運動および一般運命の理論』にはただ一つの数式も書きこまれておらず、情念引力・斥力の計算が具体的にはどのように行なわれるのか明らかではない³⁶。いずれにせよ、フーリエの情念引力（あるいは斥力）は系列 (la série) と呼ばれる人間集団において働くものとされ、それは落体现象のような垂直的なものではなく、系列の成員相互の水平的なものともみることができる。そして、物質世界から情念の世界へと引力概念を拡張した点で、ニュートンの万有引力以上に普遍的なものであるとフーリエ自身は自らの理論をとらえていた。「引力および四運動統一という二つの理論を手中にしたときから、私

³² Ibid, p.20. 訳書上巻 29 頁。

³³ Ibid, p.21. 訳書上巻 30 頁。強調原文。

³⁴ Ibid, p.20. 邦訳上巻 30 頁。強調原文。

³⁵ Ibid.

³⁶ 構想は壮大だが具体的でないこのあたりの書きぶりがフーリエの思想を、後世をして狂気、錯乱、誇大妄想として評価させる要因の一つであり、それもたしかに或る程度妥当な位置づけではあろうが、もともとフーリエのこの書物は全 8 巻が予定されていたうち実際には第 1 巻しか刊行されなかったもので、あるいは彼は続刊に具体的な計算式を示そうとしていたのかもしれない。

は自然の秘文を読み始めた。」³⁷ フーリエの情念引力論をメガロマニーと評することはたやすい。だが、それ自体きわめて情念的なこの理論も、〈想像的重力論〉の系譜に連なる奇妙な思想形象として、われわれの想像力の一つの現れとしては非常に興味深く、それが後に空想的社会主義と呼ばれることになるユートピア構想の基礎理論として着想されたものであることを考えれば、これもまた人間や社会に対する（幾分奇矯ではあるが）真摯な思想として価値のあるものであろう。だからこそ、フーリエの思想は20世紀にベンヤミン (Walter Benjamin, 1892-1940) やブルトン (André Breton, 1896-1966) といった思想の革命者たちをあれほどにも魅了したのである³⁸。〈重力の克服〉と〈重力への同意〉の二つの軸で想像的重力論を分析している本稿で、そのいずれに属するともわかには決め難いフーリエの情念引力論をここに紹介したのも同じ理由による³⁹。

6. 落下する月—イタロ・カルヴィーノ

其人曰、天果積氣、日月星宿不当墜邪。
〈其の人曰く、天果たして積気ならば、
日月星宿は当に墜つべからざるかと。〉
『列子』天端第一・一四

ギリシア神話から20世紀のSFまで、〈重力の克服〉という志向は垂直の想像力にとって主要な動機であり続けた。だが、重力に身を任せ、低きへ落ちることを求める、いわば〈重力への同意〉という指向もまた、

³⁷ Fourier, *op.cit.*, p.22. 訳書上巻 31 頁。

³⁸ 石井洋二郎『科学から空想へ——よみがえるフーリエ』、藤原書店、2009年、第二部を参照。

³⁹ 自身のユートピア構想の実現のために、人間の情念引力を否定すべきものとはみなしていない点で、フーリエの思想は、しいて言えば〈重力への同意〉の系譜に位置付けることが一応は可能であろう。ただ、本文でも述べているように、そもそも彼の〈引力〉論は水平的なものなので、垂直的なものである〈重力〉の概念とは微妙にずれるところがある。

ヴェルティカリズム

垂 直 軸の観念史にとって重要なモチーフである。ほかならぬニュートンの『プリンキピア』には、アリオストやシラノが飛翔の夢を見た月もまた、重力に同意する星として現れる。「月は地球の重力により、地球に向かって落下し続けている。」⁴⁰ 万有引力の理論では、月は夜空に銀色の冷光を反射する巨大な林檎である。もっとも、この〈落下する月〉は——落下する林檎とは異なり——実際には落下を引き起こす重力と、地球軌道から飛び立とうとする慣性運動とが釣り合って周回軌道を回っているので、地上に落ちてくることはない。それにしても月はほとんど奇跡のような均衡がかるうじて維持されている危うい位置に浮かんでいるのだ。

もし月が地球の重力に引き寄せられて落下したら——。20世紀イタリアの作家イタロ・カルヴィーノ (Italo Calvino, 1923-1985) の手になるコスモグラフィア・ファンタスティカ 幻想宇宙誌『ゼロ時間』(Ti con zero, 1967)⁴¹ には、そんな事態が起こった地上の様子をコミカルに描いた「柔かい月」という短篇が収められている。この小説の年代記では、「月は元来、太陽の周囲をまわる惑星であったが、地球が近くにあったため、軌道から逸らされ、地球の引力に吸い寄せられて、次第に接近し、ついにはわれわれ地球のまわりにその軌道を描くことになった。」⁴² 地球の引力圏に宙づりとなった月は、その表面の物質が溶融し、地球へと落下する。柔らかな月が「ぼしゃっ！」と降ってきたのだ⁴³。落下した月物質は堆積し、地球の大陸を形づくった。月の降る空に望遠鏡を向ける天文学者シビルは言う。「月はとても柔らか

⁴⁰ Isaac Newton, *Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica*, 1687. 実際には、シャトレ公爵夫人 (Gabrielle Émilie Le Tonnelier de Breteuil, Madame la marquise du Châtelet [Chastellet], 1706-1749) による以下の仏訳から引用した。 *Principes Mathématiques de la Philosophie Naturelle*, Paris: Desaint & Sailant, Lambert, 1759, p.13. Cf. 川辺六男訳「自然哲学の数学的諸原理」, 川辺編『ニュートン』, 世界の名著・第31巻, 中公バックス, 中央公論社, 1979年。

⁴¹ カルヴィーノ『柔かい月』(脇功訳), 河出文庫, 2003年。

⁴² 同書, 9頁。

⁴³ 同書, 19頁。

く、地球は硬く強固で十分に耐えるのよ。」⁴⁴ では、月がもし耐えられなければどうなるのか？ 「地球の力で落ち着くところに落ち着くわ。」アポロ宇宙船によって、人間が地球の重力を脱し、月面へと降り立ったのが1969年——アリオストやシラノの夢が（米ソの軍事対立を背景に）なかば暴力的な形で実現してしまった年。その2年前に書かれた『ゼロ時間』では、月のほうが地球へと落下してきた。柔らかくゼラチン状の月の破片は、地球の重力に同意したのか、あるいは月の重力を克服したのか——。

第二次大戦中に青年期を過ごしたカルヴィーノは1945年のイタリア解放に至るまでパルチザンに参加していた。同じ頃、フランスでレジスタンス運動に参加していた或る女性哲学者が残した手稿のなかに、地球の重力に引かれる月について書きとめた断片があることを私は思い出さずにはいられない。それは次のような一節だ。「ニュートンの問い？ なぜ月は落下しないのか？ ただ重力だけがあるのなら、すべては落下していて、なにも存在しないはずだ。」(C-I)⁴⁵ 月を虚空に引きとめているものは何か——。次節では、この閨秀哲学者の想像的な重力論を通して、落下の形而

⁴⁴ 同書、15頁。

⁴⁵ Simone Weil, *Cahiers*, t. I, Paris: Plon, 1951. 山崎庸一郎・原田佳彦訳『カイエ』、第1巻、みすず書房、1998年。ヴェイユの手書きノート（以下『原カイエ』と呼ぶ）は全17分冊からなる。これを翻刻した公刊版『カイエ』(*Cahiers*)には、ブロン社旧版3巻本(Simone Weil, *Cahiers*, t. I, t. II, t. III, Paris: Plon, 1951, 1953, 1956)、ブロン社新版3巻本(Simone Weil, *Cahiers*, t. I, t. II, t. III, Paris: Plon, 1970)、ガリマル社ヴェイユ全集版4巻本(Simone Weil, *Œuvres complètes*, t. VI-1, t. VI-2, t. VI-3, t. VI-4, Paris: Gallimard, 1994, 1997, 2002, 2006)の3種類のエディションが存在する。三つの公刊版は収録方針が異なり、たとえばブロン社旧版の第1巻には『原カイエ』第1冊が収録されていなかったり、テキストの切り方が異なったりする。したがって、テキストの絶対番地を示すために、本稿では『原カイエ』の分冊番号(I~XVII)を示す。たとえば、「C-I」とあれば、ヴェイユの手書きノートの1冊目(『原カイエ』第1分冊)であることを示し、この番号はみすず書房版邦訳『カイエ』(第1-4巻)の目次に示された(カイエI~カイエXI)に対応し、かつガリマル社ヴェイユ全集に示

上学を検討しよう。

7. 落下の形而上学—シモーヌ・ヴェイユ

“Deux forces règnent sur l’univers: lumière et pesanteur.”

〈二つの力が宇宙を支配している——光と重力。〉

Simone Weil, *La Pesanteur et la grâce*.

哲学者シモーヌ・ヴェイユ (Simone Weil, 1909–1943) の思想の中心に「重力 (la pesanteur)」の概念があることはつとに知られている。彼女の没後刊行された断章集のタイトルは『重力と恩寵』⁴⁶ であり、次の断章が冒頭に配されている。「魂の自然な働きは、すべて物質における重力の法則と類似した法則に支配されている。恩寵だけが、そこから除外される。」(強調原文)『重力と恩寵』のもととなったヴェイユの『カイエ』全体を通読すると、重力のテーマは随所に現れる。ヴェイユにとって重力とは何であったか。それはまず——ボシュエにとってそうであったように——必然性をあらわす。彼女は「重力のように抵抗できないもの」(C-IV) という言い方をする。そして、「いかにしてこの重力の作用を逃れたらよいのか」(C-IV) と問う。これは、いわば〈重力の克服〉の指向である。だが、やが

されているカイエの番号 (K1~17) に対応する。ただし、プロン社旧版では『原カイエ』の番号は示されていない。また、みすず書房邦訳版『カイエ』では『原カイエ』の XII 以降は訳出されていない。引用の底本としたフランス語テキストはガリマール社全集版であり、訳文はみすず書房邦訳版を基本とし、ときに若干の変更を加えた。なお、みすず書房版の邦訳『カイエ』第4巻〔富原真弓訳、1992年〕は、邦訳独自の編集であり、ヴェイユの『超自然的認識』(*La connaissance surnaturelle*, Paris: Gallimard, 1950) と題された著作の手稿に基づくもので、「アメリカ・ノート」と呼ばれる7冊のノートと「ロンドン手記」と呼ばれる1冊の手帳から構成されている。『超自然的認識』からの訳は、邦訳カイエ第4巻に依り、ロンドン手記はEL、アメリカ・ノートはCAとして出典を示す。ちなみに、『超自然的認識』の公刊テキスト(Gallimard, 1950)に基づく邦訳は田辺保訳、筑摩書房、1976年。

⁴⁶ Simone Weil, *La Pesanteur et la grâce*, Paris: Plon, 1947. ヴェイユ, 田辺保訳『重力と恩寵』, ちくま学芸文庫, 1995年。

てヴェイユは重力のような必然性に同意すること、過酷な必然的状况を肯定することにこそ恩寵への契機があると考えられるようになる。あらゆる物質は重さを持ち、重力に同意している。だから虚空に放てば重力に同意し、大地へと落下する。物質が重力に同意することは「物質の忍耐」と呼ばれる。「物質の忍耐を模倣すること」(C-XI)がヴェイユの倫理的思考の規範となる。

想像的な重力は、物質に働く重さのイメージ化である。ヴェイユにあつては、重さはまた、〈水〉という元素に象徴化される。水は、つねに低いところに向かって流れ、また決まった形をとらず常に周囲の物体の形状に従う同意の元素であり、すぐれてヴェイユ的な物質である。さらに、ヴェイユの哲学的イメージにあつては、石の彫刻も〈重力への同意〉を象徴する。「彫刻——それぞれのものは重力に従って下降する(液体の石)。だがそれにもかかわらず、すべては上昇する」(C-III, 強調引用者)。重い石でできた彫像は、まさに重力=重量を感じさせる物質塊であり、大地に向かう土的存在である。だが彫像は全体としてみれば生身の人物のように大地に立っており、重力の作用のままに地面に張り付いている土塊とは異なる。だから「すべては上昇する。」ここにあらわれているのは、まさに下降する重力の法則と、そこから上昇の運動を引き起こそうとする恩寵の作用にほかならない。

だが、ヴェイユの言う重力と恩寵を、落下させようとする下向きの力と上昇させようとする上向きの力の相克という関係で捉えることは、おそらくは的を外している。ヴェイユにあつては、二つの作用は常に弁証法化されている。だから、落下運動とそれを引きとめようとする恩寵の働きというよりは、落下に同意することがそのまま上昇することになるような形而

上学的力動が、そこには働いているのである⁴⁷。これを〈重力の弁証法〉と名付けよう。

重力の弁証法は、〈天秤〉や〈梃子〉のイメージからも導かれる。天秤は一方の皿が下がることで、他方の皿が持ち上がる。梃子は、一端を押し下げること、他の一端が持ち上がる。しかも、押し下げる方の一端を支点から遠くすることで、ほんのわずかな重さをかけるだけで大きな重さを持ち上げることができる。「梃子、下降させることによって、上昇させること、おそらくわれわれには、このようなかたちでしか上昇することは許されていない。」(C-III) また、ヴェイユの著作のなかで、受肉の問題が論じられる際にも、垂直軸の弁証法的イメージが現れる。ヴェイユによれば、受肉 (l'incarnation) が極まるのはキリストの復活においてではなく、十字架上の死に際してである。「[...] 十字架上の苦悩は復活よりも神的なものであり、キリストの神性が極まる一点である。」⁴⁸ ここで、〈十字架〉という形象に注目しよう。ヴェイユによれば、十字架は秤にほかならない。「聖金曜日の讃歌のなかにある秤に喩えられた十字架のイメージ」において、「キリストの肉体はごく軽い分銅であったが、天と地の間の距離によって、宇宙と釣合いを保てたのである。」⁴⁹ 宇宙の全重量を支えるか弱い身体——。「天秤としての十字架、梃子としての十字架。上

⁴⁷ むしろ、落下することなくはじめから天上をめざすような上昇には、価値が見出されない。ヴェイユにおいて重要なのは、落ちることによって昇ること、低められることによって高められることである。

⁴⁸ Simone Weil, *Intuitions pré-chrétiennes*, Paris: La Colombe, 1951. Nouvelle édition, Paris: Fayard, 1985, p.84. ヴェーユ「神の降臨」(中田光男・橋本一明訳), 『シモーヌ・ヴェーユ著作集』第2巻, 春秋社, 1968年, 318頁。

⁴⁹ Simone Weil, *La Condition ouvrière*, Paris: Gallimard, 1951, coll. «Espoir». ヴェーユ「奴隷的でない労働の一条件」(山本頭一訳), 『シモーヌ・ヴェーユ著作集』第2巻, 春秋社, 1968年, 200頁。

昇の条件としての下降。」(C-X)⁵⁰

重力はまた、〈自然性〉を表わすイメージをも形成する。人は地面の上を歩く。これは自然なことだ。もし仮に虚空や水の上を歩くことがあれば、これは自然に反することだ。ヴェイユは述べる。「歩いている人間とは、これ以上に平凡なものが他にあらうだろうか。ところが、人間が水の上を歩くとすれば、これは平凡なことではない。」(C-V, 強調原文)あるいはまた、次のようにも述べている。「当否はともかくも、賢者や聖者たちについて空中浮揚や水上歩行の物語が語られてはいるが、すべての人間は重力に服している。/ 精神的重力に関しても同じである」(C-IV, 強調原文) 落下に同意する者は、落下から逃れられる。賢者や聖者とは、落下しない存在、つまり最も低いところにあり、それ以上落ちるべき下方をもたない存在である。地の底に、落下はない。「地球の中心においては、物体はもはや重さを有しない。」(C-IV)ここにヴェイユの思想の核をなす、イメージの反転がある。重力を首肯し、下へ下へと落ちる。すると、地の底にいたり、落下は止まる。重さのない地の底は、いわば重力のない世界だ。重力にひたすら同意することで、重力から解き放たれ、恩寵を得る。想像力のなかでは、単に大地へと墜落するイメージのなかに、重力への同意が美しい夢を生み出すことは稀である。ヴェイユの形而上学的イメージにおいても、墜落する大地は反転し、空そらにならなければならない。空の高みへと落ちること。ここに、垂直軸のイメージが生気づく様を目撃することができる。

⁵⁰ 神学的な事項について少し補足するならば、受肉とは、神が人の姿をとって現れること、つまり神が肉を纏うことである。同時に、イエスという人間からみれば、肉体を捨て、神になることでもある。その奇跡的な出来事は十字架という天秤、重力=重さをはかる仕掛けの上で遂げられるとヴェイユは言うのである。なお、ヴェイユの使う「重力」の原語 la pesanteur については脚註3を参照。

8. 樹木論—林檎, 葡萄, 奇妙な果実

“Je dis que si quelqu'un médite au monde, c'est la Plante.”

〈世界のなかに瞑想する何者かがいるとすれば、
それは植物にほかならないと私は言う。〉

Paul Valéry, *Dialogue de l'arbre*.

ところで、『プリンキピア』の著者に対してヴェイユは手厳しい。「この地上におけるエネルギーはすべて、太陽からくる。重力を除いて、すべては、太陽エネルギーと重力の結合物である。(超自然的なパンは別として。) / 天上界の法則と重力を同一視したこと (ニュートン) は、まさしく不信仰のわざであった。結構なことだ。ニュートンから発した科学が破産したのは。」(C-V, 強調原文) ニュートンの万有引力説は万物に働く物理作用であり、月も林檎も重力の観点からは同一の身分を与えられる。ヴェイユの重力論は、これとは異なり、むしろ天上界と月下界を分断するアリストテレスの落体説に近いとも言える。重力は地上に特有の現象である。そして、天上に満ちるエネルギーは太陽の光である。「この地上、この感覚的な宇宙には二つの力しかない。ひとつは重力、もうひとつはわれわれが重力を相殺する助けとなるエネルギーの総体。しかもこれらのエネルギーはすべてが [...] 太陽に、つまりは光と同じ源泉に由来する。[...] 世界の秩序はこれら二つの力からなる^バ均衡=^ン天秤である。」(C-IX)

太陽の光は恩寵であろうか。太陽光から直接エネルギーを取り出すのは、植物の光合成である。この植物的生こそ、ヴェイユにとって理想の在り方であり、光合成を行なう葉緑素は、彼女の形而上学が指向するところとなる。植物、ことに樹木は、^{ヴェルテイカリスム}垂直軸の形而上学を象徴する自然物である。樹木は地に根を下ろし、太陽の光を受け、光に満ちた天をめざすことを本性とする。光は太陽から地上へとつねに降下する。地上からみれば

光も落下に同意する存在であり、樹木が天をめざす成長は光の下降によって成立している。上昇と下降。ここにもまた、垂直軸の運動の弁証法というすぐれてヴェイユ的なイマージュが成立する。ヴェイユが樹木について述べている箇所を引こう。「樹木や植物は、天から落ちてくる清浄な水（養分になる露）と天から降り注ぐ光から育つ。樹液や葡萄酒は天上の水と火の混淆物である。樹液の葉緑素には、天上の火を定着させ結晶させる特性がある。」(CA-V)人間も植物や樹木のように生きるとき、恩寵への契機を掴む。「私たちが[...] 思念の〈太陽〉の光を願い求めるとき、そのときこそ葉緑素の効能と類似した超自然的なものが私たちのなかに現れる。」(C-VIII)だから、「恩寵は私たちの葉緑素である。」(C-VIII)また、ヴェイユは次のようにも述べる。「われわれが葉緑素を有しているなら、われわれも樹木のように光を糧とすることができるのだが、キリストが葉緑素のかわりをしてくれる。」(CA-V)「アメリカ・ノート」に記されているのは、死の前年の思索である。ヴェイユの思想は、重力という自然学的イマージュに駆動される形而上学から、極度に神秘的な色合いを強める。

ヴェイユによれば、植物的な生を生きる人間の血は、樹液であり、また樹液の流れる枝に実を結ぶ葡萄からできる深紅の酒なのだ。「血は樹液や葡萄酒と同じものである。葉緑素の効能によって水と太陽エネルギーが合成された植物の樹液は、私たちのなかに入って血となる。」(C-VIII)ここでは、言うまでもなく最後の晩餐における葡萄酒＝キリストの血というイマージュが念頭に置かれていると同時に、プラトン『ティマイオス』の次の箇所を踏まえているようだ⁵¹。「神が、これ[理性的魂]を神霊(ダイモーン)として、各人に与えた[...]。そして、そのものはまさに、われわれの身体の天辺に居住し、われわれが地上ではなく天上の植物であるかのごとく、われわれは天の縁者に向かって、大地から持ち上げられてい

⁵¹ この箇所とほぼ同様の記述が、後年の「アメリカ・ノート V」にもあり、そこでは『ティマイオス』が言及されている。

る [...] ということになります。なぜなら、[われわれの] 神的なる部分
は、魂が最初にそこからうまれたそのところ [天] に、われわれの頭でも
あり根でもあるものを吊るして、身体全体を直立させているわけなので
からね。⁵² 林檎の自然学者を不信仰であると誇る哲学者は、葡萄の樹、
そして葡萄の果実に言及し、キリストの受難を独特の語り口で論じる。ま
ずヴェイユは『ヨハネ福音書』の一節（一五・一以下）を引く。「私は葡
萄の樹で、あなたはその枝である。葡萄の樹につながっている枝は実を
結ぶ。葡萄の樹から切断された枝は燃やされるであろう。」そして、次の
ように述べる。「葡萄の樹に接ぎ木されるようお願い求めること。なぜなら
われわれはすでに切断されてしまっているから。[...] 圧搾する段になる
と、カナの奇跡⁵³と最後の晩餐を想起すること。/われわれ自身の葡萄酒
がああ葡萄酒、つまりキリストの血に変容するようお願い求めること。」
(CA-V)

ヴェイユにとって樹木は葉緑素が太陽エネルギーから生のエネルギーを
取り出す〈生命の樹〉である。「生命の樹とは星辰をその果実とする両極
の軸のことである。太陽を食する者は生きるであろう。光を食する者は生
きるであろう。」(CA-V) 両極の軸という言葉に注目しよう。これは、さき
に引いた『ティマイオス』の「天上の植物」に対応する。生命の樹とは旧
約聖書『創世記』(三・二二)に出てくる樹木で、その実を口にした者は
永遠の命を得るという⁵⁴。だが、葡萄の樹液（あるいは葡萄酒）を受難の
キリストの血として強調するヴェイユにとって、生命の樹は、そのまま
〈死の樹〉ともなる。「ある物体（とりわけ死刑囚……）を樹の枝に吊る

⁵² プラトン『ティマイオス』（種山恭子訳）、90A、岩波書店版全集、第12巻、173
-174頁。この引用については、[] 内は訳者、[] 内は引用者による。

⁵³ キリストの力により、水が葡萄酒へと変じる奇跡。新約聖書『ヨハネ福音書』、
二・一以下。

⁵⁴ アダムとエヴァが楽園を追放されたのは「生命の樹へと至る道をまもるため」
である。『創世記』三・二四。

す。(果実の場合も同じ。)物体を下方に⁵⁵引き下げるのは重力だが、物体を地面の上方に保ち、重力が物体を引き下げるのを可能にするのは樹木に結晶化した太陽エネルギーである。下降力と上昇力の組み合わせ、または均衡。十字架という天秤。」(C-X)この記述は、もはや論理的・分析的な読解をほとんど拒むものであろう。上昇と下降、生と死の反転が極限にまで至ったイマージュである。1942年、ナチスの迫害から亡命し米国に滞在していたヴェイユが、対独レジスタンスに参加するため、ロンドンに旅立った船中で書かれたノートでは、この〈首吊り〉をめぐる記述は、さらに神秘的な傾きのもとに展開される。「本来、絞首刑というものは、天上の水と火からなる新生のために、肉的な誕生を無効にすることによって、人間を樹木の果実に変容させようとしたのではないか。」(CA-V)「[...]首吊りとは、世界樹(まことの葡萄の樹)に接ぎ木されようとする試みではないのか。われわれはその葡萄の樹から切断された枝ではないのか。[...]吊り下がった人間は、人々がその肉を食らい、その汁を飲む果実のようなものではないだろうか。」(CA-V, 強調引用者)米国南部で黒人がリンチにあつて殺され、木からつるされた様子をルイス・アレン(Lewis Allan, 1903-86)がその詩のなかでうたった言葉、「奇妙な果実(strange fruit)」が思い出される。世界を支える巨大な樹木から切り離されたわれわれは、重力の作用を受け、落下にさらされる。その落下の力を一身に受ける絞首刑は、われわれを世界樹へと回帰させる。それはディオニュソス的な唯一の生命への合一をめざす衝動的なのだろうか。唯一の生命として生きることは、今生の生においては端的な死である。ヴェイユの求めたものは死であったのか。

ヴェイユ晩年の死の色に満ちた思索に、われわれはどう接したらよいのだろう。それは生の形而上学を徹底し、論理の崩壊すれすれのところに辛

⁵⁵『カイエ』邦訳版の訳註によれば、手稿では「上方に」となっているが、おそらくヴェイユの誤記との由。

うじて成立する弁証法によって、彼方の観念世界を把握した見^{ヴォワイヤント}者の到達した深みを示すものであろうか、あるいは、重力への同意の徹底のうちに恩寵の契機を見出す形而上学によって独特な迂路を経ながらも人間の生を肯定する特異な社会思想を構築した知性にとって、或る種の後退を意味するものなのか。その考察は、別の機会に委ねなければなるまい。

結び——新たなる重力圏へ

“Alors, que choisir? La pesanteur ou la légèreté?”

〈ここでわれわれは何を選ぶべきであろうか？

重さか、あるいは、軽さか？〉

Milan Kundera, *L'Insoutenable Légèreté de l'être*.

落下すること。低みへと至ること。近代的な思考のなかで、こうした入り方が首肯されることは稀である。高みをめざすこと。上昇すること。進歩の観念とともに、翼の想像力は人類を宇宙へと送り出すまでに至った。だが、高さをめざす性向に当初からイカロスの影が付いて回ることは、力学的な必然である。より高い位置から落ちる物体ほど、大きな力をもつ。その力は水位の落差を大きくするほど大きなエネルギーを取り出せる水力であると同時に、高所から落下する物体ほど大地へと打ちつけられたときに大きくなる破壊力でもある。そして、おそらく文明の最初期の機械的考案であろう艇子の原理がそうであるように、低めることによってのみ高みにいたることができることもまた力学的な必然である。ライト兄弟の飛行機は高樓からロープをつけた重い錘を落とすことで離陸時の推進力を得ていた⁵⁶。科学史において、重力という〈力〉は、その正体が依然大いなる謎として残りつづけていながら、今日、〈場〉という空間の緊張状態をあらわす表象によって説明されることで、あたかも概念的に克服されたかにも

⁵⁶ 金子務・荒俣宏『アインシュタインの天使』、哲学書房、1991年、93頁。

重力の観念史

える。また技術史的にみれば、位置エネルギーを運動エネルギーに変換する水力機関や振子のような仕掛け、つまり重力を利用する技術をわれわれの文明は所有してきたが、近代以降の文明史は、気球、飛行機、ロケット、人工衛星など、地球の重力を、それを振りきるだけの別の力によって克服してきた経緯をもつ。それはよい。だが、重力理論から場の理論へと至る近代物理学史のなかで重力を概念的に克服しようとした過程で生まれたものが原子爆弾であり原発事故であるならば、そして地球の重力を技術的に克服した結果が高速長距離移動の代償としての飛行機墜落事故であり、さらには重力を克服し空中に射出したのち今度は重力を利用して目標へと落下することで敵の破壊・殺傷をはかるミサイル兵器こそロケット技術開発の真の目的であったことを想起するならば、われわれは重力を克服しようとする文明に重大な批判的省察を加えなければなるまい。そのときわれわれは、いま一度〈重力への同意〉の思想を構築しなければならないだろう。

※ 本稿の引用文について。脚註で、原書名のあとに邦訳書名が掲げてあるものについては、引用はその邦訳書による（ただし前後の文脈の関係で訳語・訳文を改変したことがある。訳者の方に、お礼とお詫びを申し上げます）。原書名のあとに Cf. と書いて邦訳書名を挙げたものは、訳文は拙訳だが、既存の邦訳が存在することを示す。

* 本研究は科研費（特別研究員奨励費、研究課題番号 10J05482、研究代表・奥村大介）による成果の一部である。